

吉野山の豊かな森づくりへ

植生観察会 10年間の記録



目 次

まえがき	1
会長あいさつ	2
各種図面	3
年別活動内容	6
吉野山で見られる植物の紹介	
<草本類>	17
<木本類>	30
<その他>	35
吉野山で見られる鳥類の紹介	37
主な植物の花暦	39
観察会で確認した植物一覧表	42
観察会で確認した野生動物一覧表	49
協議会構成組織	51
あとがき	52

COLUMN

スマレの見分け方	19
旧吉野山スキー場跡の再生	20
セイヨウタンポポ	23
ピックアップ ～マイヅルソウ&マムシグサ～	27
アズマヒキガエル	28
樹木ガイドブック	30
秀峰 駒ヶ岳	35
大沼ネイチャーセンター	36
木の測り方	41
吉野山の野鳥	50

まえがき

大沼周辺の国有林は、大沼国定公園エリアの内外に所在しており、漁業関係者から「水質の保全」、観光関係者からは「景観の維持向上」、自然保護関係者からは「野生生息環境の維持向上」などが強く求められているなど、環境保全や森林整備に係る関心や期待の高い地域となっています。

一方、国有林野を管理・経営する、北海道森林管理局 駒ヶ岳・大沼森林ふれあい推進センター(旧名「駒ヶ岳・大沼森林環境保全ふれあいセンター」)は、「NPOや森林ボランティア団体等が自然再生を目的とした活動に対する支援や協力」、「国有林野のフィールドを活用した森林環境教育の実施」などを主な活動として、2004年(平成16年)4月に国有林野の組織再編により設置・開所しました。

その活動の一環として、吉野山国有林(渡島森林管理署、2133林班)において、ボランティア団体、学識経験者、関係行政機関で構成された「自然再生検討委員会」を設置し、各層からの意見や要望などを踏まえた『多様性のある森林への再生』として活動を行ってきました。「自然再生検討委員会」での一定の役割を終えた後は、「大沼自然豊かな森づくり協議会」に単年度ごとの事業計画や事業内容の検証などを継承しながら、現在まで活動を行ってきています。

2005年(平成17年)2月には、ボランティア団体と連携した森林づくりの実践と森林環境教育の推進をめざすとしてまとめられた「グランドデザイン」が確認され、その活動も20年が経過し、継続的に実施してきた「吉野山植生観察会」による植生調査も10年を迎え、調査データも一定程度集積されることとなったことから、この度、『吉野山の豊かな森づくりへ 植生観察会 10年間の記録』として、この間の活動内容をとりまとめた報告書を作成いたしました。

特に、植生観察会における植生調査は、木村マサ子、村本ゆり子両氏にガイドを務めていただき、多大な御協力を賜りました。紙面を借りて厚く感謝申し上げます。

報告書では、吉野山で観察される植物・野生動物などを紹介しており、今後の活動にも参考となるよう活用できれば幸甚です。

2026年(令和8年)3月

大沼自然豊かな森づくり協議会 事務局

会長あいさつ

大沼公園の町づくりは、1905年(明治38年)鉄道が開設し、その建設を担った事業家がここに旅館を建て、広く文人を招待し、彼らの助言を得て湖畔の散策路や橋の整備をしたのが始まりとのこと。

大沼の吉野山の由来も、奈良の町から見通す桜の名所「奈良の吉野山」を想い文人が名付けたといえます。

その当時の吉野山は原生な広葉樹の森林が一望に繁茂し、ヤマザクラもちらほら季節の移ろいを表現していたことでしょう。

吉野山スキー場は1925年に開場(「七飯町歴史館だより」より)し、その後、社会のニーズによりスキー場が本格的に開設(1962年～)され、スキーブームで盛況、そして1988年に閉鎖、ところがスキーコース跡地は10年経っても森に返らず、2本のコースは山頂まで惨害を見せることになります。

それで、スキーを楽しんだ私達が北海道森林管理局の森林^{もり}づくりに参加させてもらうこととなりました。

前に、エンレイソウの研究で知られた鮫島先生、100年前にロシア人植物調査員が吉野山から持ち帰った草本を調べに訪れたロシア人のガイド役であった木村マサ子さんに熊の盾役として呼ばれ、吉野山から連なる旧国道を同行しました。

私には単なる「草」でしたが、研究に値する「草」がここにはあると知りました。

今日、ヒトを含む生物にとって最も困難な事象は温暖化でありましょう。

原因は、CO₂ほか温室効果ガスの増加です。それゆえ、これからは何事も温室効果ガスを減らすことが必要条件になります。

CO₂を回収し、地中に埋める「CCS事業」では1トン当たり12,800～20,200円かかるといえます。(2025.10.25 朝日新聞)

日本全体の現在の年間排出量は11億トン(CO₂換算、2021年)ですから、年間1.2～2.4億トンの貯留目標に係る経費は天文学的数字になります。

これに対して、日本の森林は1年間に1haで15～30トンのCO₂を固定します。(宇沢弘文著、「地球温暖化を考える」)

吉野山から連なる広葉樹の森は、数万トンのCO₂を固定し、多様な生物を育成し、大沼湖にたくさんの魚を繁殖させます。

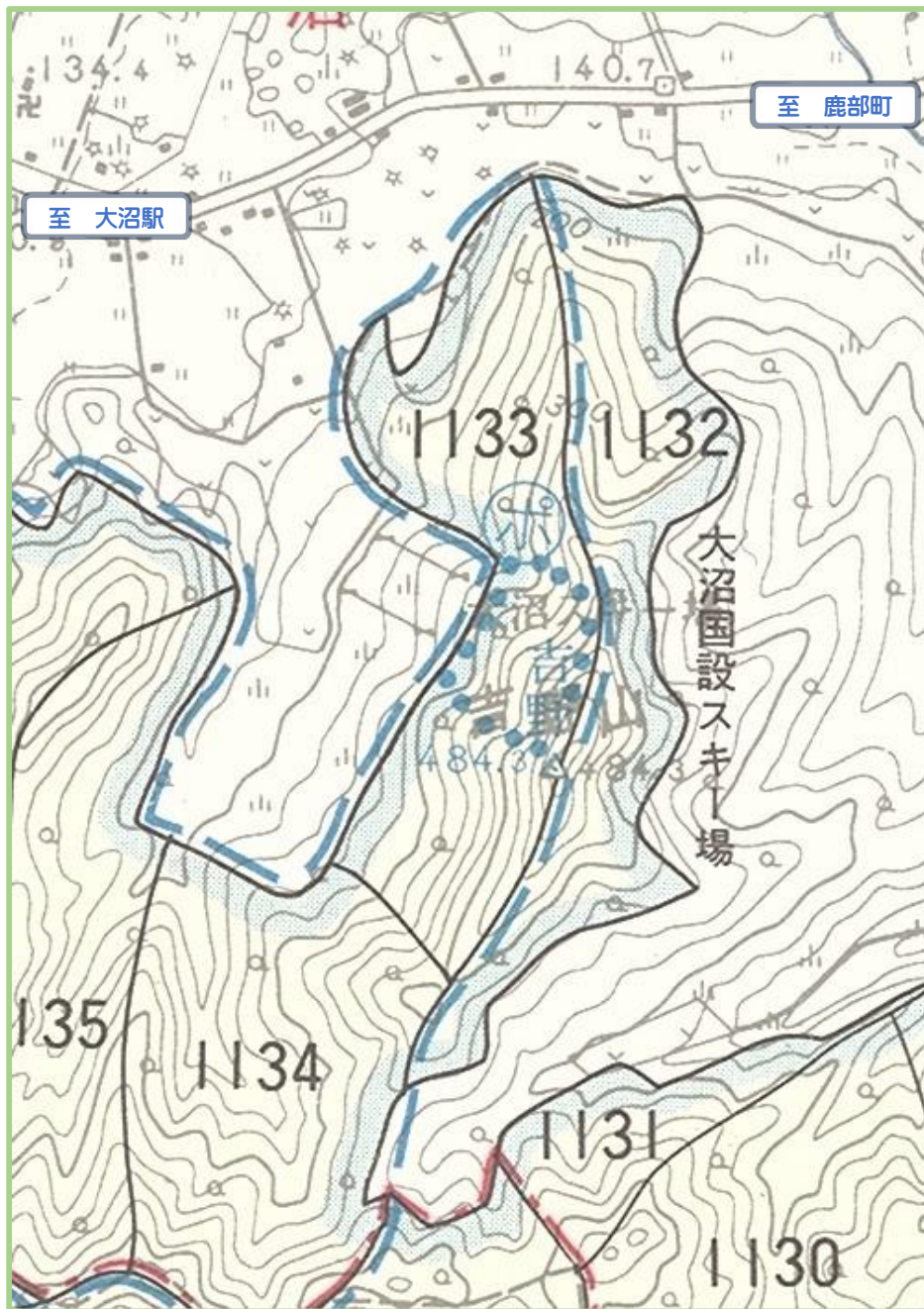
この度、北海道森林管理局のご理解・ご支援、植物の木村マサ子さん、村本ゆり子さん、野鳥の大野喜久男さん、菌類の明石秀平さんをはじめ、皆様のご指導により、吉野山の豊かな植生を一覧表に確認することができました。山と皆様に感謝申し上げます。



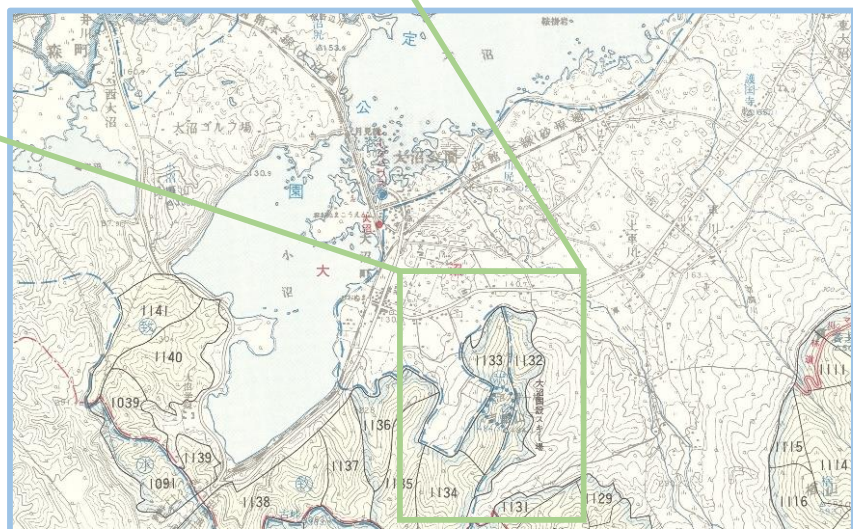
2026年(令和8年)3月

大沼自然豊かな森づくり協議会

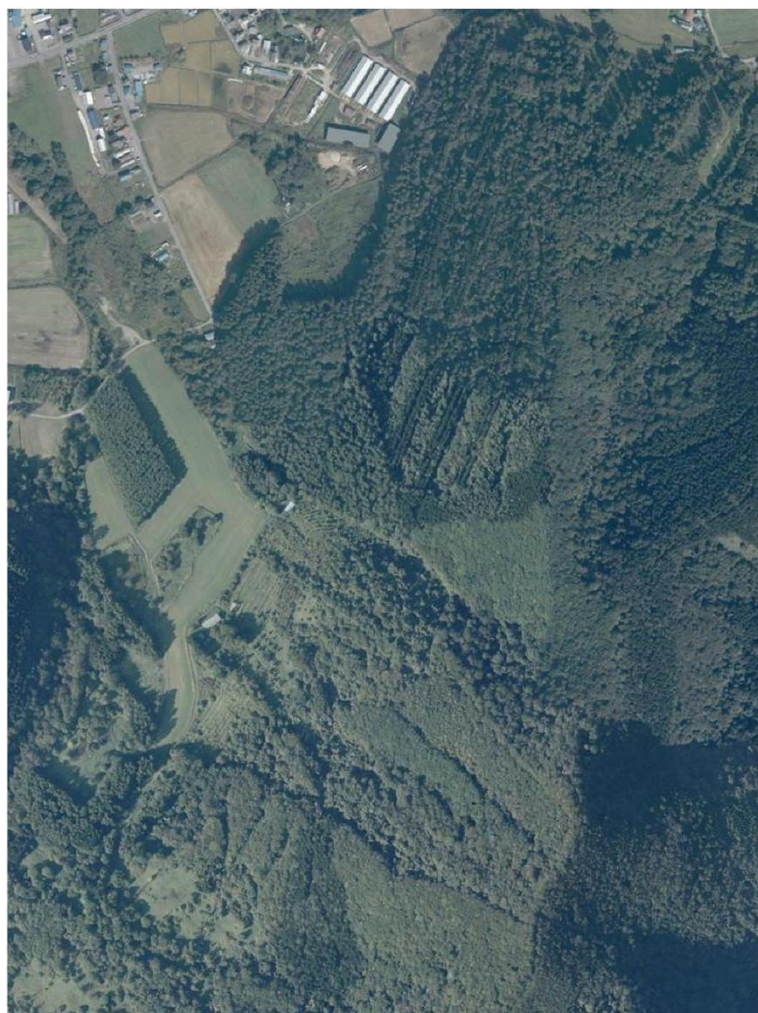
会長 宮崎 司



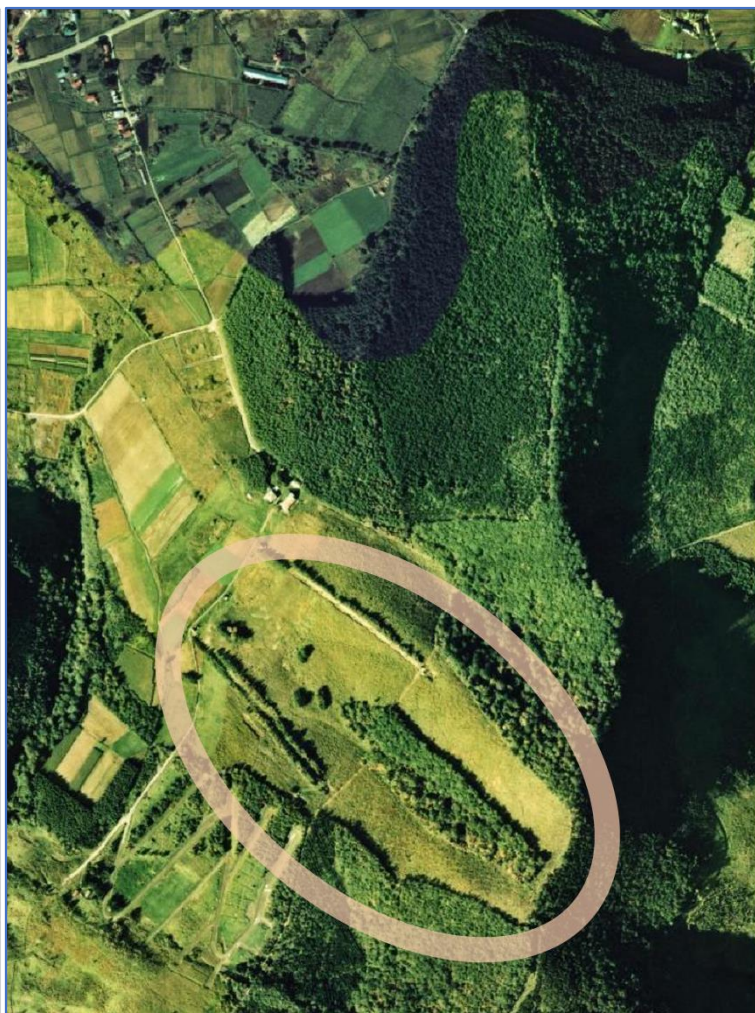
これは、1980年（昭和55年）当時に旧函館営林署で使用されていた図面です（函館営林署の管轄であったため、1133林班でした）。
 青の点線で囲まれた区域を「野外スポーツ地域」として設定し、「大沼国設スキー場」の名称で吉野山スキー場が利用されていました。



吉野山スキー場跡の今と昔



今(2025年)



昔(1975年)

これは、国土地理院がオープンデータとして公開している衛星写真です。
現在の写真はうっすらとスキー場跡がわかる程度ですが、1975年（昭和50年）の写真ではスキー場のゲレンデがはっきりと確認できます。

年別活動内容 【2016年（平成28年）】

3月14日に開催された総会では13名が出席する中、「大沼地域自然再生検討委員会」の終了に伴い、協議会の新たな役割の確認を行いました。植生観察会は、春季は5月21日、秋季は10月15日の2回を実施し、協議会メンバーを中心に延べ39名の参加がありました。

<5月21日> 明るくなった林は、広葉樹の森に相応しいスミレやエンレイソウ、ニリンソウ、ビネチドリなどが確認された(エンレイソウはクロミのものが多い)。
 <10月15日> スキー場跡、第2リフトの場所まで観察を行ったが、16年前の2000年春にスキー場跡地の観察会へ地元の小学生が参加し、この地の細いカシワの木に記念の名札をつけた。16年経ったこの日、カシワの幹は直径20cmほどに立派に育っていたことを知り、広葉樹の森への変化は確実に進んでいることを確認した。
 木村 記

春季観察会



秋季観察会 (北海道新聞(夕刊)10月24日発行 写真:北海道新聞社提供)

森の成長 散策し実感

七飯 吉野山で植生調査



スキー場の第2リフトがあった付近で植生調査を行う参加者

【七飯】町内にある吉野山の植生回復調査会が15日に開かれ、ボランティア団体「大沼自然豊かな森づく

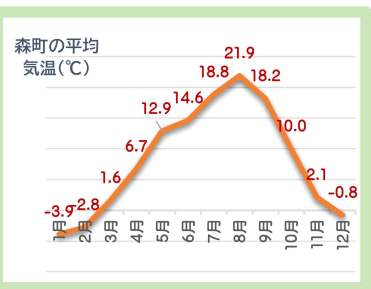
り協議会のメンバーや一般市民など約20人が参加した。同協議会は、2004年

から多様性のある森林の再生を目指して吉野山国有林の森林整備を行っており、昨年からは市民の参加を募って植生変化の観察会もしている。
 今年最後の開催となった今回は、北海道アウトドアガイドの木村マサ子さんと吉野山スキー場跡付近を散策し、これまでに270種以上確認されている植物の現況を観察。参加者は、ささやぶだったこの地に広葉樹が増えていることを確認し、森の成長を実感していた。
 観察会は来年以降も継続して行う予定。問い合わせは事務局の駒ヶ岳・大沼森林ふれあい推進センター ☎0138・51・0381 (塚麻那)へ。



牧草地で休憩

秋季観察会



※ 平均気温と日照時間のグラフは、参考値として近隣の森町のデータを記載した

<当年度調査で新たに確認された植物>

ウシハコベ、エソノミツモソウ、オオバナノミミナグサ、カモガヤ、クルマムグラ、サワアザミ、サワヒヨドリ、トチバナシジミ、トリアシショウマ、ナギナタコウジュ、ニシキゴロモ、ニリンソウ、ハナタテ、ヘビイチゴ、ヘラオオバコ、ホソバナツルリンドウ、ミズ、ミツバヒヨドリ、ヤブハギ、ヤマブキショウマ、ルイヨウボタン

【この年の日本(北日本)の天候】

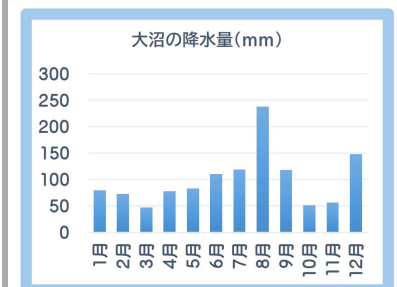
～気象庁の報道発表資料より抜粋～

<この年の特徴>

北日本の秋を除いて全国的に高温傾向が続いた。8月に4つの台風が上陸し北海道では記録的な大雨で河川氾濫や土砂災害が発生。

<北日本の概況>

- 冬: 冬型の気圧配置が長続きしなかったため暖冬で降雪量も少なかった。
- 春: 全国的にも顕著な高温。3月と5月は移動性高気圧に覆われ晴れる日が多かったことから降水量も少なかった。
- 夏: 低気圧の影響を受けやすかったため6・7月の降水量は多かった。8月に台風が相次いで接近・上陸し顕著な多雨となり、夏の降水量は平年比160%を超えた。台風の影響で記録的な大雨。
- 秋: 9月は高温だったが、10月からは断続的に大陸から強い寒気が流れ込み平均気温は14年振りに低温となった。



年別活動内容

【2017年（平成29年）】

「協議会総会」は3月6日に開催しました。総会の中で各委員から「森林や自然に関心を持つ世代が育っていない」「観察会に子どもが参加する体制構築が必要」との意見が出されました。

春季観察会は6月17日（協議会メンバー14名、一般参加者6名、計20名）、秋季観察会は9月23日（協議会メンバー13名、一般参加者1名、計14名）に、それぞれ実施しました。

特に春季観察会は北海道フラワーソン2017に登録し、観察を行いました。

<6月17日>「フラワーソン2017」に参加し、特定種10種中3種を確認

（マイヅルソウ、サイハイラン、ホオノキ）。



木村 記

春季観察会（北海道新聞 6月18日発行 写真：北海道新聞社提供）

吉野山で植物の葉の付き方や色を観察するフラワーソンの参加者



植物たくさん見つけた

フラワーソン道南でも調査

野生の花の開花状況などを全道一斉に調べる「北海道フラワーソン」（北海道新聞社、北海道新聞野生生物基金主催）が17日、渡島・檜山管内でも開かれた。参加者は晴天の下、野山などを歩き、花や草木の形や生育状況を観察した。

フラワーソンは「フラワー・ウォッチング・マラソン」の略語で、野生植物の観察を長期にわたって続けることを意味している。1997年から5年ごとに開かれており、今回で5回目。

七飯町の吉野山では、大沼自然豊かな森づくり協議会（宮崎司会長）が年2回行っている観察会に合わせ

て実施。メンバーら20人が

ヘルメットや防虫網を身に着けて山に入り、「昔、シロメクサで輪飾りを作ったよな」と話しながら、114種の草花を確認した。指定された10種の植物を調べる特定調査では、3種の花を発見した。

函館市の会社員早川みゆきさん（35）は「街中になく花や植物を見つけるのが楽しい」と語った。

檜山管内でも4チーム約20人が参加。厚沢町町立鷗小の校庭では児童ら6人が、キンポウゲやムラサキケマンなど43種の植物を見つけた。案内人の加藤一彦さんによると「身近な場所がたくさん生命を感じることができた」などの感想が出たという。（信岡悠）

<当年度調査で新たに確認された植物>

アメリカマゴボウ、オオハナウド、クモキリソウ、スズメノカタビラ、ナガバツメクサ、ナガボノシロフレモコウ、ヒメスイバ、ブタナ、ヤブジラミ

【この年の日本（北日本）の天候】

～気象庁の報道発表資料より抜粋～

<この年の特徴>

8月はオホーツク海高気圧の出現により曇りや雨の日が続く不順な天候。10月は秋雨前線や台風の影響により月降水量がかなり多く、月間日照時間もかなり少なかった。

<北日本の概況>

冬： 寒気の南下が弱く、気温の高い日が多かったため暖冬であったが、冬の日照時間は少なかった。

春： 晴れた日が多かったため、降水量は少なく日照時間は多かった。高気圧に覆われ晴れた日が多かったため、平均気温は高かった。

夏： 8月上～中旬に北東からの冷たい気流の影響により不順な天候。低気圧や前線の影響により降水量は多かった。

秋： 秋雨前線の活動活発により10月は顕著な多雨となった。

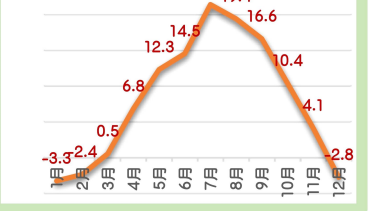
春季観察会



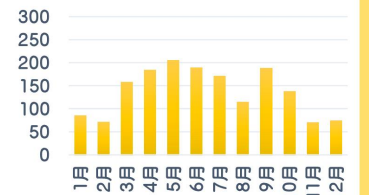
秋季観察会



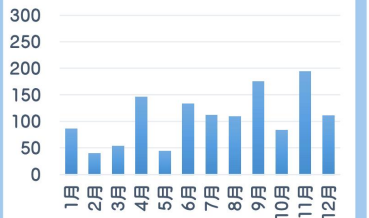
森町の平均気温(°C)



森町の日照時間(h)



大沼の降水量(mm)



※ 平均気温と日照時間のグラフは、参考値として近隣の森町のデータを記載した

年別活動内容 【2018年（平成30年）】

協議会総会は3月5日に開催。総会の場では「ヒグマやクマゲラの生息状況」「地域の産業発展の観点からさらなる協議会活動の充実」について意見交換がされました。

植生観察会は春秋の2回を計画していましたが、5月19日に予定していた春季観察会は荒天のため中止とし、秋季観察会は10月13日に28名の参加のもと実施しました。

観察会のようす



大沼の雪月風花
9月11日撮影



<クロミノエンレイソウ>



<ミヤマエンレイソウ>



<オオバナノエンレイソウ>

<エンレイソウ>

- ◎ エンレイソウの仲間は、開花までに10～15年を要します。その後、10年程度ほぼ毎年花を咲かせるといわれます。
- ◎ 北海道では7種以上のエンレイソウが確認され、大沼湖畔では5種を確認しました。
- ◎ 「延齢草」のほか、「養老草」「延年草」と長生きに縁がある別名があります。
- ◎ 植物は子孫を残すため、一般的には「風で飛ぶ」「鳥や動物に運ばれる」など工夫しながら種を新たな地に運んでいます。エンレイソウは、種に含まれる「エライオソーム」という物質を利用した変わった生存戦略があります。このエライオソームでアリが引き寄せられ、アリは種を巣に運び、多くはエライオソームだけが食べられ、残った種は巣の外に捨てられます。捨て場には種が山のように積み、春にはモヤシ状に発芽することがあります。このような物質を持つ植物は200種類ほどあるといわれます。

<当年度調査で新たに確認された植物>

アキノナギツカミ、アブラガヤ、オオアザミ、オオバギボウシ、オオバナノエンレイソウ、カラフトホンバハコベ、クロミノエンレイソウ、ノミノツツリ、ハルタテ、ヒメカンズゲ、ミスタマソウ

【この年の日本（北日本）の天候】

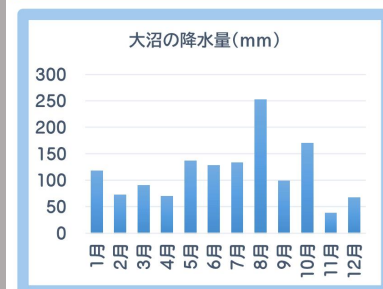
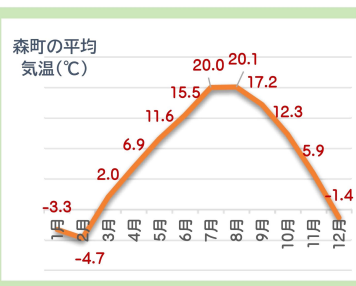
～気象庁の報道発表資料より抜粋～

<この年の特徴>

冬の平均気温は全国的に低く、しばしば強い寒気が南下。9月下旬には台風24号が上陸し、広い範囲で暴風や高潮となった。

<北日本の概況>

- 冬： 発達した雪雲が日本海から流れ込み、低気圧の影響で大雪の日があった。
- 春： 寒気の南下が弱く、3～5月の月平均気温は高かった。低気圧の通過時に流れ込んだ湿った空気の影響により大雨になることが多く降水量は多かった。
- 夏： 低気圧や前線の影響を受け、6月には大雨の日があり月の降水量はかなり多かった。8月には秋雨前線や台風の影響によりたびたび大雨になった。
- 秋： 9月は高気圧に覆われやすく、11月は寒気や気圧の谷の影響を受けにくかったことから降水量は少なく、日照時間は多かった。



※ 平均気温と日照時間のグラフは、参考値として近隣の森町のデータを記載した

年別活動内容

【2019年（平成31年～令和元年）】

「協議会総会」は3月5日に七飯町にて開催。協議会委員からは「植生観察会での調査結果のとりまとめを」「吉野山での森づくり活動が環境教育を推進する場となればよい」などの意見が出され、行事参加者の増加や環境教育への活用などに向けた活発な議論がされました。

春季観察会は5月18日（協議会21名＋一般7名＝28名）、秋季観察会は10月5日（協議会18名＋一般16名＝34名）にそれぞれ実施しました。

春季観察会



<キアゲハの幼虫>
 幼虫から三齢までは鳥の糞に似せた保護色、四齢幼虫では白地に黄色と黒の斑点模様、五齢幼虫になると、黄緑と黒の縞模様で、黒い縞部分に橙色の斑点があります。
 セリ科の葉を食べるので、エゾニュウにはよくキアゲハの幼虫がついています。

<5月18日>
 熱心な参加者も増えて、草花の見分け方や生育環境も探った。 木村 記



エゾニュウの葉(左)と花(右)



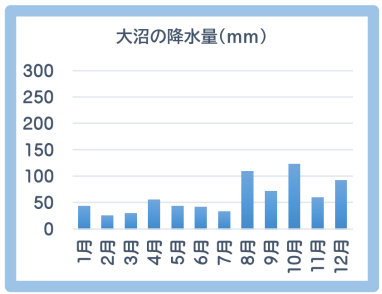
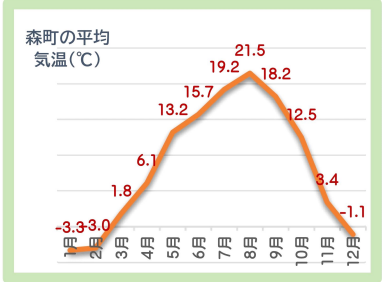
秋季観察会



<ガガイモ>
 日本神話では、スクナビコナの神が舟に乗ってきたといい、これはガガイモの実を2つに割った小さな舟のこと指します。



大沼の雪月風花
12月9日撮影



※ 平均気温と日照時間のグラフは、参考値として近隣の森町のデータを記載した

<当年度調査で新たに確認された植物>

アカザ、アメリカオニアザミ、エゾエンゴサク、エゾタンポポ、オオカモメツル、オカトラノオ、タチカタバミ、ヌスビトハギ、ハツカ

【この年の日本(北日本)の天候】

～気象庁の報道発表資料より抜粋～

<この年の特徴>

気温の高い状態が続き、年平均気温は全国的にも高かった。台風の接近に伴い暴風雨や大雨があった。

<北日本の概況>

冬： 低気圧や湿った空気の影響を受けにくかったため降水量はかなり少なめ。平均気温は平年並みだったが2月上旬は強い寒気により気温が大幅に下回った時期もあった。

春： 高気圧で晴れた日が多く、日照時間はかなり多かった。また、晴れた日差しの影響で、気温もかなり高く、特に5月下旬は記録的な高温となった地点が多かった。

夏： 6月は気圧の谷の通過により数日周期で天気が変わりやすかった。7月は前線や湿った空気の影響により曇りや雨の日が多かった。平均気温は暖かい空気に覆われる時期が多かったため高かった。

秋： 大陸から進んできた暖かい高気圧に覆われやすかったため平均気温は高く、日照時間も多かった。

年別活動内容

【2020年（令和2年）】

毎年3月に開催している「協議会総会」は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、開催を中止し、書面議決としました。委員からは「UAVなどの活用で森林の変遷を記録できないか」「これまで実施してきた自動撮影装置による研究成果を報告してほしい」といった意見・要望が出されました。

毎年実施してきた森林植生観察会は、新型コロナ感染症対策から公募をせず、講師とセンター職員のみで春季（5月21日）、秋季（10月7日）にそれぞれ実施しました。

<ニホンアマガエル>

水辺に棲む生物と思われていますが、樹上での生活に適応しています。

多くのカエルは産卵期にオスがメスを呼び寄せるために鳴きますが、アマガエルはそれとは関係なく鳴きます。



秋季観察会



大沼の雪月風花
5月21日撮影



<ウワミズザクラ>

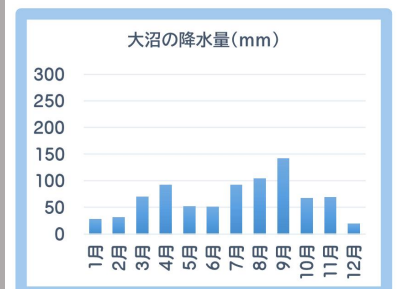
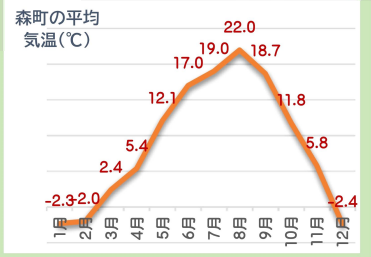
かつて、この木の枝で亀の甲羅などを焼き、そのあとにできた溝の位置で吉凶を占ったことから、「上溝桜」の名がつけられました。

写真は、白いブラシのような花が咲く前の蕾のようです。



<ウツボグサ>

円筒形の花の形が藪（うつば、武士が弓矢を入れて背中に背負った道具）に似ていることから和名。花が終わると褐色に変わり、一見枯れたように見えることから「カゴソウ（夏枯草）」とも言われます。



※ 平均気温と日照時間のグラフは、参考値として近隣の森町のデータを記載した

<当年度調査で新たに確認された植物>

イノコヅチ、ウツボグサ

【この年の日本(北日本)の天候】

～気象庁の報道発表資料より抜粋～

<この年の特徴>

年間を通して気温の高い状態が続いたため、年平均気温はかなり高かった。冬型の気圧配置が続かなかつたことから降雪量はかなり少なかった。

<北日本の概況>

冬： 冬型の気圧配置となる日が少なかったことから、高温となる時期が多かった。降雪量はかなり少なかった。

春： 3月と4月に発達した低気圧や前線、湿った空気の影響を時々受けたため降水量は多かった。南からの暖かい空気が流れ込みやすく記録的な高温となった。

夏： 6月上旬は高気圧に覆われ晴れの日が多かった。8月は低気圧や前線の影響をたびたび受けたため数日の周期で天気が変わった。

秋： 前半は低気圧や台風の影響で曇りや雨の日が多く、日照時間も少なかった。9月前半は気温が高く残暑も厳しかった。秋の平均気温はかなり高かった。

年別活動内容 【2021年（令和3年）】

協議会総会は、新型コロナウイルス感染症対策から書面による開催としました。委員からは、「感染症の影響により計画どおりの活動ができず残念」との声がありました。

この年の森林植生観察会も、感染症予防の観点から一般公募をせず、講師とセンター職員のみで春季（4月28日）、秋季（10月13日）にそれぞれ実施しました。

春季観察会



<フッキソウ>

常緑の低木です。雄花は茶褐色の葯をもつ白いおしべが4本突き出します。雌花は雄花の下につきます。

秋季観察会

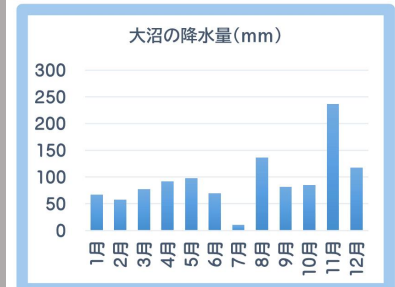
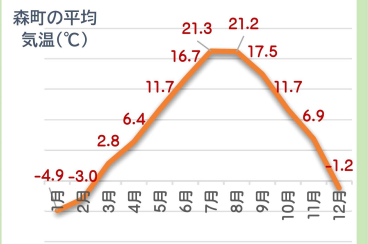


<ケチヂミザサ>

「チヂミザサ」に比べると花軸や葉に白い毛が生えています。細長い種子には、粘着物質がついた長い芒（のぎ）があり、この芒により衣服にたくさんくっつく「ひつつき虫」の一種です。



大沼の雪月風花
4月28日撮影



※ 平均気温と日照時間のグラフは、参考値として近隣の森町のデータを記載した

<当年度調査で新たに確認された植物>

イワミツバ、ケチヂミザサ、タニタテ

【この年の日本（北日本）の天候】

～気象庁の報道発表資料より抜粋～

<この年の特徴>

年平均気温は高く、3月の月平均気温は北日本で平年差+2.6℃と最も高かった。夏は太平洋高気圧が北日本に張り出し、北海道でも猛暑日が続く顕著な高温となった。

<北日本の概況>

- 冬： 前半に強い寒気の影響を断続的に受けたため寒冬だった。後半はシベリア高気圧の勢力が弱く冬型の気圧配置は長続きしなかった。
- 春： 3月は北からの寒気の流入が弱かったことからかなりの高温が続いた。4月は低気圧や前線の影響を受けやすく降水量がかなり多かった。春の平均気温・降水量は高かった。
- 夏： 6月は記録的な多照で気温もかなり高かった。7月中旬以降は高気圧に覆われ晴れた日が多く猛暑日が観測されるなど気温は高かった。
- 秋： 9月は高気圧に覆われやすく晴れた日が多かった。10月に入り前線の影響で曇りや雨の日が多かった。11月は寒気の影響が弱く、気温は高かった。

年別活動内容 【2022年（令和4年）】

協議会の総会は前年に引き続き書面開催としました。
 森林植生観察会は3年ぶりに一般公募を行い、春季は6月18日（協議会メンバー12名、一般参加者1名、計13名）、秋季は10月15日（協議会メンバー15名、一般参加者3名、計18名）に、それぞれ実施しました。
 特に春季観察会は北海道フラワーソン2022に登録し、観察を行いました。

秋季観察会



春季観察会



『北海道フラワーソン』とは・・・

「フラワーソン」は、「フラワー・ウォッチング・マラソン」の略、北海道で行われる市民参加型のイベントで、見つけた植物の数を競いますが、ただ種数を競うのではなく、活動を通じて環境保護に対する意識を高めるとともに、地域間のつながりを深めることを目的としています。

1997年に第1回を開催、以後5年毎に実施され、2022年は第6回を数えています。

北海道を約950地区に分けて、その地区にどんな花が咲いているかをグループ単位で調べます。

調査結果は、北海道新聞の紙面で紹介するほか、参加者に報告書が配布されています。

<6月18日>

フラワーソンでは特定種調査10種のうち、マイヅルソウ・オオバナノエンレイソウ・サイハイラン・ホオノキの4種を確認。

全道的に増えている帰化植物上位5種は、吉野山でも同様の傾向。温暖化の影響か、全般に2017年調査より開花が早い。

<10月15日>

毎回の昼食時は、宮崎会長さんの作業場（ワカサギ漁の網の保存と修理場）を開放してもらう。

それぞれ持ち寄った弁当を分け合っ、おしゃべりも楽しい観察会です。 木村 記



<当年度調査で新たに確認された植物>

オオイヌノフグリ、シラヤマギク、ヒレハリソウ、マツヨイセンノウ

【この年の日本（北日本）の天候】

～気象庁の報道発表資料より抜粋～

<この年の特徴>

春から秋にかけて全国的に気温の高い状態が続き、年平均気温は全国的にも高く、北日本ではかなり高かった。8月は梅雨前線や湿った空気の影響から曇りや雨の日が続く不順な天候となり多雨寡照となった。

<北日本の概況>

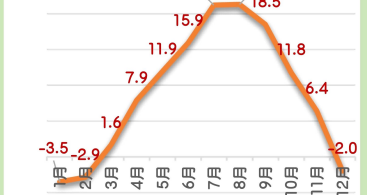
冬： 日本海側では記録的な大雪となったが、太平洋側は冬型の気圧配置が解消する時期もあり晴れた日が多かったため、日照時間も多くなった。

春： 高気圧に覆われやすく晴れた日が多かったため、降水量は少なかった。5月は暖かい空気が流れ込みやすく、平均気温はかなり高かった。

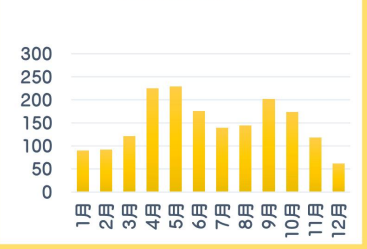
夏： 平均気温はかなり高く、7月上旬には記録的な高温となった。降水量は8月を中心にかなり多かった。

秋： 高気圧に覆われる日が多かったことから降水量はかなり少なかった。9月は暖かい空気に覆われた日が多く残暑が厳しかった。

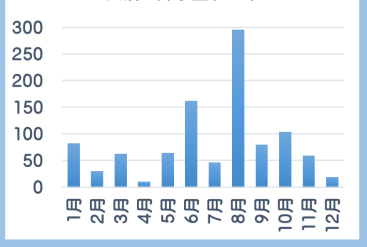
森町の平均気温(°C)



森町の日照時間(h)



大沼の降水量(mm)



※ 平均気温と日照時間のグラフは、参考値として近隣の森町のデータを記載した

年別活動内容 【2023年（令和5年）】

協議会総会は3月8日、数年ぶりに対面開催とし、12名が出席する中で活発な議論がされました。委員から「間伐など身体を動かす森林作業の実施」「伐採する木の選木や樹高測定などの学習」といった要望が出され、今後の活動に盛り込むことを確認。

森林植生観察会は、春季5月20日、秋季10月14日にそれぞれ開催し、協議会メンバーと一般公募によるボランティア延べ24名の参加を含む63名で、季節ごとの草花を楽しみながら調査を行いました。

春季観察会



秋季観察会



大沼の雪月風花
10月14日撮影

<10月14日>
爽やかな秋晴れで、吉野山の裾野を一周する。
見上げれば、ツタウルシの紅葉、足元には蛾や蝶も飛来する。

木村 記



大沼の雪月風花
5月14日撮影

<当年度調査で新たに確認された植物>

イチヤクソウ、カキドオシ、ササバギラン、タガネソウ、エソノコンギク

【この年の日本（北日本）の天候】

～気象庁の報道発表資料より抜粋～

<この年の特徴>

春から秋にかけて気温は高く低温は一時的だったため、年平均気温は全国的にも高かった。

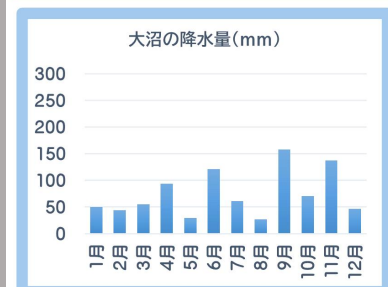
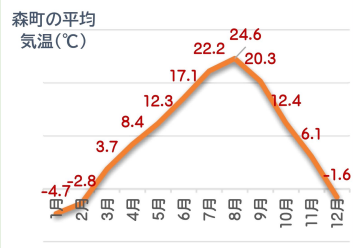
<北日本の概況>

冬： 寒気の影響により12月や1月下旬は平均気温は低かった。冬型の気圧配置が強まった12月後半は交通機関等に影響が出るような大雪となった。

春： 暖かい空気が流れ込みやすかったため平均気温はかなり高かった。高気圧に覆われやすく、晴れた日が多かったため日照時間もかなり多かった。

夏： 暖かい空気に覆われやすく平均気温はかなり高かった。周辺海域での海水温の顕著な高温も影響した。晴れた日が多かったため、日照時間も多かった。

秋： 晴れた日が多かったため、日照時間も多かった。低気圧や寒気の影響を受けた時期もあったため降水量は多かった。



※ 平均気温と日照時間のグラフは、参考値として近隣の森町のデータを記載した

年別活動内容

【2024年（令和6年）】

協議会総会は3月13日に、16名の委員が出席し開催されました。委員からは「吉野山の森林利用や経緯について知りたい」「若年層の参加を期待」といった意見が出され、原案は承認されました。

森林植生観察会は春季のみの1回で、5月18日に一般公募による参加者を含め36名が調査を行いました。

春季観察会



総会のようす



<シガシラ>

別名「ムカデグサ」「ヤブソテツ」「イワシボネ」などは羽状複葉の葉の形からつけられました。

比較的斜面を好み、湿地などの土壌条件が悪いところでも耐えるので、シガシラの群生地などは、木を植えたり作物の栽培に適さないという指標になる植物です。

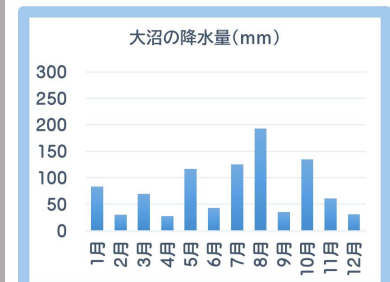
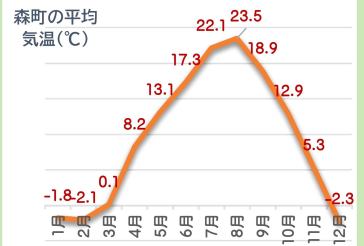


<5月18日>

眺望の良い日は、野外の昼食会。
木村 記



大沼の雪月風花
5月18日撮影



※ 平均気温と日照時間のグラフは、参考値として近隣の森町のデータを記載した

<当年度調査で新たに確認された植物>

なし

【この年の日本(北日本)の天候】

～気象庁の報道発表資料より抜粋～

<この年の特徴>

ほぼ年間を通じて気温の高い状態が続き、平均気温は全国的にもかなり高かった。年間の日照時間もかなり多かった。

<北日本の概況>

冬： 冬型の気圧配置は長続きせず気温はかなり高かった。平年に比べ高気圧に覆われて晴れた日が多かったため、日照時間も多かった。

春： 暖かい空気に覆われやすく、平均気温はかなり高く日照時間も多かった。

夏： 夏を通じて暖かい空気に覆われたため、平均気温はかなり高く日照時間も多かった。

秋： 寒気の影響を受ける時期はあったものの、おおむね秋を通じて暖かかった。高気圧に覆われやすかったが、11月を中心に低気圧や前線の影響から降水量はかなり少なく日照時間はかなり多かった。